

みやぎSDGs Farm



みやぎSDGs Farm

国連が提唱する「SDGs(持続可能な開発目標)」を軸に企業や個人が連携し、より豊かな地域づくりを目指す取り組み「みやぎSDGs Farm」の基幹プログラムです。SDGs活動を推進する人材「みやぎSDGsアンバサダー」を養成するなど、2021年から河北新報社が運営しています。



詳しくはこちらから

賛同企業
募集中!!

[申し込み・問い合わせ]

河北新報社営業局

TEL. 022-211-1318

☑ koukoku@po.kahoku.co.jp

今回参加させていただいた「みやぎSDGs塾」での学びを通じ、日常生活の中で小さなことを継続的に取り組むと決意しました。



高橋浩一さん

働く場面では、効率的な時間管理を心がけ、無駄な残業を減らすとともに、職場での学びや成長の機会を大切にします。同僚との協力を通じて生産性の向上を図り、働きがいのある環境づくりに貢献していきたいです。

地域社会においては、公共交通機関の積極利用や徒歩での移動を心がけ、環境負荷の少ない移動手段を選択します。地域のイベントや清掃活動への参加を通じて、住み続けられるまちづくりの一員として責任をもちたいです。

継続的な実践への決意

山一地所 佐藤浩一さん

果たしてまいります。消費行動では、本当に必要なものを見極めて購入することや、食品ロスを減らすよう食材を最後まで使い切ることを実践します。リサイクルやリユースを積極的にを行い、モノの寿命を延ばす工夫を続けます。修理可能な製品を選び、長く使える質の良いものを大切に消費スタイルを維持します。

これらの取り組みは小さな一歩かもしれませんが、継続することによって大きな変化につながると考えます。日々の選択と行動を通じて、持続可能な未来への責任を果たし続けることを心に宣言します。



祝「みやぎSDGsアンバサダー」認定! 「わたしのSDGs活動宣言」Vol.47



私が大切にしたいSDGs活動は、「食を通して未来へつなぐこと」です。大学

で食について学ぶ中で、食は環境問題、地域社会、経済、そして人々の暮らしと密接に関わっていることを実感しました。特に印象に残ったのは、私たちの身近な選択一つひとつが、地球規模の課題に影響を与えているという点です。日本では、多くの食品が廃棄されており、背景には過剰な買い物や食べ残し、賞味期限に対する過度な意識などがあります。現状を知ってから、私は普段の生活の中で、食べ残しをしないこと、必要な分だけを購入することを意識するようにになりました。一見すると小さな行動ですが、資源を無駄にしない意識を持つ

食からつなぐ、未来への約束

宮城大学 フードサービス論研究室 中村暖彩さん

ことが、持続可能な社会の実現に近づくと考えています。

また、アルバイト先では、賞味期限が近い商品をお客様におすすめしたり、仕込み量を工夫して廃棄を減らす方法を考えたりしています。現場で働く中で、SDGsは特別な活動ではなく、日々の仕事や生活の中で実践できるものであると感じるようになりました。

将来は、食産業が持続的に発展していく仕組みづくりに関わりたいです。食から未来をつなぐ一人として、これからも日々できることに向き合い、小さな挑戦を積み重ねていきたいと考えています。



高橋浩一さん

ドドライブや、コンビニでの「手前取り」といった行動が、いつの間にか生活に溶け込んでいます。その中で、私が注目するのは「地産」の概念です。

昨年、私は生まれ育った関東を離れ、宮城に移住しました。この地で驚いたのは、スーパーの充実した地産品コーナーでした。宮城県産の農産物・海産物が豊富に並び、光景は、地産地消が進んでいる証だと驚きました。また、芋煮会のシーズンにスーパーが鍋を貸し出す光景は、文化と食材が一体となった、まさに地産地消の素晴らしい象徴です。

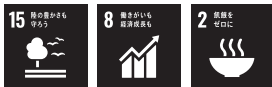
「地産」から始まる持続可能な社会

国分東北 高本和樹さん

みやぎSDGs塾での南三陸町の訪問は、この「地産」の可能性をさらに深く教えてくれました。南三陸杉が間伐・加工され、そして有名建築物に使われるまでの過程を知り、宮城の地産品が広範囲な分野で活用されていることに気づきました。

フードロス削減、地産地消、南三陸杉の活用といった取り組みは、コロナ禍を経てその重要性を改めて認識したSDGs達成に向けた身近な実践例です。

SDGs先進県に移住した1人として、身近で出来ることから、SDGs塾でつながった輪を生かし、南三陸のような地域と企業が連携した、宮城全体でのSDGsの取組にもチャレンジします。



おめでとうござります!!

みやぎSDGs Farm